

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

子どもの観察の芽／さいたま市立本太保育園（埼玉県）

今年は、いつ頃からセミを見付けることができましたか？「探す」「見付ける」「捕まえる」「抜け殻を集める」など、どのような子どもの姿が見られますか？今回は、虫との関わりを大切に考え、セミと関わる体験に継続して注目した実践です。折々の姿を事例にまとめることで、子どもたちの中に育まれていく「科学する心」が見えてきました。



● セミへの興味／5歳児

✦ 「虫、見付けた！」／5月～

園庭でアリを観察する子どもたちの姿がある。「セミの羽！アリがくっ付いている！」「白いの運んでるね」「ダンゴムシ、運んでるんだよ」「こっちの巣に入っていく。ゼリー置いてみようか？」などと話し合う子どもたち。そして、ゼリーを置いて次の日に見てみると、「全部 無くなってよ！」「アリが全部食べたか、カラスが食べたかだね！」と話す姿があった。

✦ 「セミの抜け殻！見付けた！」／7月上旬～

近隣小学校で散策を始めるとすぐに、「セミの抜け殻、あったよ！」と誰かが言う。すると、「見せて！見せて！」と集まる子どもたち。近くの地面のあちこちにある穴を見て、「中に幼虫がいるかも…」と言い、観察している。

✦ 「セミ、よく観よう」セミの羽化／7月中旬～

羽化しようとしているセミの幼虫（終齢幼虫）をAちゃんが持って登園した。Aちゃんのお母は、「かわいそうと思ったけれど…、見たら逃がしてあげてね」と話す。セミの幼虫を飼育ケースに入れ、子どもたちが観察する。図鑑を見ていた子どもが、園庭の松の木の下から葉っぱの付いた蔓を持ってくる。そのまま、飼育ケースに入れようとした友達に、「違うよ。葉っぱを取って入れるの」と本を指差す。そこには、セミの幼虫が葉に止まって羽化する様子が載っていた。みんなは、葉をちぎって虫かごに入れる。

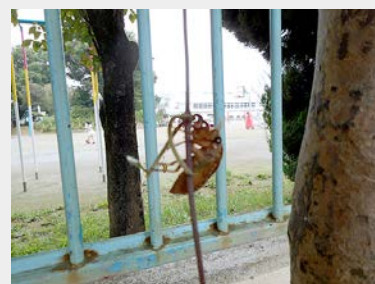
あまり触ってはいけないと思っているようで、気を付ける姿が見られる。

Aちゃんのお母さんに朝言われた「逃がしてあげて」を覚えていた子どもが、「逃がす」と話し、幼虫を飼育ケースから出すことにする。園庭の木に松の木からとった蔓を結び付け、そこにセミを止まらせ、上に登っていく様子を観察する。

午睡中に羽化したセミを保育者が持ってきて、飼育ケースに入れた。

午睡後、すぐにセミを出して手に乗せる子どもがいる。「飛ばかもしれないからドアの開けっ放しはダメだよ」とお迎えの保護者にも注意を促していた。

「帰る時には、逃がさなくっちゃね！」と言う子どもがいる。



✦ 「逃がそう」 / 7月下旬～

翌日、登園した子どもたちは、みんなセミの様子が気になって仕方がない。朝の支度が終わるとすぐにセミの様子を見に行く。「逃げてなくて良かった!」「まだ、生きてるね」「みんなで逃がそうよ」と話している。

そして、外に逃がすことになる。

「ここが止まりやすそうだよ」「じゃあ、ここにしよう!」と金木犀の木に止まらせるが、すぐに落ちてしまう。

「こっちにしよう」と違う木の少し平らになったこぶのような所にセミを置いて、しばらくじっとして落ちていなかったため子どもたちは保育室に戻った。

おやつ後、子どもたちがセミを見に行こうとしたら、早いお迎えの子どもから、「セミいないよ。無事に逃げたみたい」と報告があり、みんな妙に納得していた。



✦ 「もう一回観てみよう」セミの抜け殻 / 8月～

お隣の小学校の教頭先生から、セミの抜け殻でセミの種類が分かる図をいただき、今まで園で見付けたセミの抜け殻や、家の近所や旅行先で見付けたセミの抜け殻を調べる。

図をよく見て、「どれかなー?」「大きさは一緒だけど…」「足が違うみたい」「色はどうかかな?」「これはアブラゼミ。間違いない!」などと話しながら観察し、次々に調べていく子どもたち。実寸大のメジャーをうまく活用して、「こっちが大きい」「これは小さい」と見比べていた。



✦ 考察と課題

子どもの「見付けた」から「よく観てみよう」「もう一回観てみよう」へと繋げることで、子どものワクワク感がどんどん膨らむのが実感できた。子どもが疑問に思ったことを友達に伝え、一緒に考えたり、調べたりする姿は「小さな研究者」のようであった。

子ども一人一人の「死」への捉え方は様々でよいと思うし、これからいろいろな経験を積んで、その子なりの見方や捉え方が定まってくるだろう。子どもたちの心に何が刻まれたのかについて、保育者、保護者、小学校の先生等の大人の手助けも借りて、今後も理解を深めていきたい。

